

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第82号 (2022. 9. 11-2022. 9. 18)

◆ 参加者: magwort, yū, passant, A, 白水ま衣, しまね, くん, Ryu sen,

風池陽一、涼閑、空瓶、susie、橘月子、宮坂恋哲、石川聡、菊池洋
勝、ゴト、西脇祥貴、輪井ゆう、元さん、冬濃(ふゆつき)、まつり
へきん、crazy lover、鴨川ねぎ、天やん、糸瓜曜日、雲上晴也、児
島成 (Uoe Kojima)、おかもとかも、太代祐一、ともなう、花野玖
あ、ぼつぽ、最中妙(新アカウント)、水の眠り、蔭一郎、休庵、小
沢史、池田吉輝、汐田大輝、木野清瀬、高木タツオ、石原とつき、
東(ころ)、いずみ、岡村知昭 【頭痛を報告するアカウント】、阿笠香
奈、海馬、須藤はる、しもじよう、桔梗葉、アラ、Moon、しろとも
生・存、抹茶金魚、馬勝、月硝子、雷(らじ)、上峰子、電車侍、向坂
濱、紅志野、パワーみりのり、森内詩紋、和泉明月子、ちゆんすけ、目下
昊、さんきょ、灰猫ニボン、haruno、片羽anju、雲雀、najiin、西沢
葉火、HAKIBIKI、あお、さんちゃん、夜間戦闘(れん)、睦月ヨシ、コ
ネコノビッチ、Tomoko、犬定住佳、kiyoka、ゼロの紙、snuffkin、
とるびごる、達郎中、古都梨衣子、たろりずむ、Hina、きんない、
Millicent、Almondmilklate、山田小太郎、同居嫁の眩き、ゆりのはな、
なゆた、黒穂 2022、罵りす、丹花ヨム、寺村た、我天Gaya、おた
ま、月波与生(一〇一名)

◆ 7・7詩、5・7・5詩

何才まで生きるつもり
の旗揚げゲーム 太代祐一
睫毛って物語だよ知らないの？ 太代祐一
向日葵がカタログにある美容室
しまねこくん
秋風の最後のほうにいる人重歯 蔭一郎
わたくしはわたしにゆかりがない秋だ 蔭一郎
髪を切ったから失恋でもしよう 蔭一郎

窓の無い集中治療室の月 菊池洋勝
世に降りし青い鳥から赤い羽根 風池陽一
クレソンとしては感情的過ぎた Ryu sen
見る人により変わりだす魚の目 空瓶
バッグには結果としてのバナナ臭 雷
くわとろくわとろとところ苛まれ 太代祐一
恋人を下音記号で可視化する 白水ま衣
ナデシコの7デシベルでする開花 石川聡
階段をのぼりきつても不眠です 石川聡
法螺貝なのは彼の体質ですから 海馬
一九六〇年代らしくドアが汚れていた 海馬
豹柄にかわるポタンは秘密なの 小沢史
お仕置きは檸檬の種をつめこんで 小沢史
楷書ではドリンクバーを愛せない 白水ま衣
学校と苗字がかわる金木犀 馬勝
万能のプッチンプリンが腑に落ちない 高木タツオ
筋肉は次の地獄にとつておく おかもとかも
唐揚げに初級呪術として檸檬 月硝子
稲掛や天然記念物の鳥 菊池洋勝
家系図のこんなところにユブサラダ 白水ま衣
書き順がなかった時代の鯉幟 太代祐一
蝶でカンニングする汗 石原とつき
ご不要のプロレスラーがちやぶ台に 岡村知昭
缶蹴りに勝ってナポレオンの仮装 岡村知昭
来年の今頃は穴の標識 西脇祥貴、
デリケートゾーンは自販機にもある 高木タツオ
世田谷にレモンの家を建てました 木野清瀨
八方へ秋焼け宿るランドセル さー
わたくしの再開発へ獅子五匹 西脇祥貴
ポケットを一つ増やして生き延びる 白水ま衣
新しい鼻血が店に並びだす おかもとかも

昼間見た夢の続きをください5文字で しろとも

悪天のにわか静けき嚮虫 mugwort

ブランケットのした悪戯する指 passant.A

絶滅のうわさの遊具追っている 涼閑

九月場所なにか起きしか伝え反り syusyu

十五夜をちよつとつまんて生きてます 橘月子

十六夜に同伴出勤してくれる。 宮坂愛哲

ゾロ目なきアナログ時計の静謐 輪井ゆう

雨降る夜線路にキスし息を継ぐ 冬憑(ふゆつき)

気まづいな神様なんて呼んでない まつりぺきん

花、花瓶、猫、留守、破片、水、花、あ まつりぺきん

廊下で猫が毛玉を まつりぺきん

幾千もあんだナシの夜飛び越えて今 crazy lover

肥ゆる秋自我は部屋から出られない 天やん

巡視船ここは十階南棟の端よ 糸瓜曜子

まんじゅさげ先師の言葉ひとつずつ 雲上晴也

燃えるのは一瞬だけで直ぐに消え 児島成

この胸の内なる花野しんとして 花野玖

只今の決まり手は寄り切り。寄り切つて衣破の勝ち。 あ

さふ言へば今年あと厄みなし栗 あ

体育祭 画面向ここのリアタイの汗 水の眠り

元氣よく走る幼子ほっこりし 一休庵

泉鏡花のタイムセールや秋の昼 汐田大輝

くちびるに触れて炎をひとつ生む 東ころろ

波照間はざわわと吹き抜ける いずみ

独り言で消化できない小指の痛み 阿笠香奈

たぶんもう三点倒立しかない しもじよう

栗拾い多く拾わせワザと負け 桔梗堇

KADOKAWAでそれでも俳句やりますか アラ

ゆかりりがりりと鳴かず蜻蛉かも 抹茶金魚

そばにいてくれるだろうかわれもこう 上峰子
石の上 何を思うや 秋の蜂 電車侍
秋遊び駄菓子屋の軒の独楽に鏝 向坂濤
ずれ落ちる眼鏡のごとき進路かな 紅志野パワーみのり
寝待月の光ぼんやり眼鏡踏む 森内詩紋
白い月浮かび目覚める曼珠沙華 和泉明月子
生活の音が聞こえぬリツイート ちゆんすけ
ぜつぼうを詠う声音を変えてみる 灰猫ニボシ
虚栗べらり捲れてお道化初む Haruko
空は在り、色即是空色即是空 片羽雲雀
未開の地行けば土竜が笑つてる harumi
駆動するカメの系譜にメロンパン 西沢葉火
カチがない 私のことか ゲームだよ HAKUBIKI
ドンタコス夫に盗られカラムーチョ あお
冷や飯にしようゆをかける台所 さんちゃん
初恋を開ける缶切りなんて無い 睦月ヨシ
彼女に見られてる猫の目の月 コネコノビツチ
月という衛星がいて二度寝する Tomoko
最後まで人の気持ち解らない式定住佳
真夜中に 必死で探す 私よさ E.yoka
高橋が血より濃いもの探してる ゼロの紙
存在は白き粉にて降り月 とるばどーる
綾部は女神と、ピースは帰国せよ 達昆古
刺すような時計の音の熱視線 古都 梨衣子
それはサバじゃなくてサンマよ山岡さん たろりずむ
子供らと子どもの遊び寒月夜 流天
眼光強く雲間に見えし 月見月 Hina
月明かりさびれたドアに花の影 きえない
皮肉屋の肉屋はしかめっ面 山田小太郎
思いはせ1000の夜をもとおりこえ おたま
stand by me 肩寄せくるのは洗濯物 我矢-Gayza

秋だなあ小田和正が泣いている 月波与生

◆ 7・7、5・7・7・5以外の短詩

目の前のひとはしらないひとだけどふたり同時にチヨキを

出します 蔭一郎

君の目が起点となつて道ができ三連休には駅地下で光る

生・存

抜け出しちゃおつかこなパーティーに死ぬまで呼ばれな

い僕ら ゴトー

虫の音に季節感じる秋風が轟音唸る台風ヤメテ 元さん

スプレーにまみれた場末の高架下 白装束が臍に佇む 鴨

川ねぎ

乳鉢でねるねるねるね磨りつぶす二十七歳ふふふと言ふ

ぼっぼ

何もかも下北沢とかに捨ててきた都落ち主婦の軽いタメ息

最中妙

夜の海で溺れるような憂鬱に隣室からの変な鼻歌 須藤は

る

鳴く鈴虫の悲しみに心を重ねる一人の夜 Moon

千の花弁を持つ妖精ピオニーが恋しくなるむくげの頃 日

下呉

ドアアイに顔ひつつけて曇り空しばらく見ている九月なの

です さぶさきち

慎重に沈まないよう歩いてくクラゲの上はとても不安定

夜間戦闘(れん)

排水溝に流れていく水をずっとみていた ぽお風呂なう

Snuffbin

ひっそりと名刺をつくる何となく名前の色を赤くできない

ぼっぼ

しやぼん玉割れては膨らみ空を飛ぶ夢を抱えたまま消えて

くく Millicent, Almondni Iklatte

◆ 詩

君を笑顔にする為に

出会ったと思っていた

今は少し違ってきた

あなたに残したい言葉の

旅を遊んでいる (ともなう)

破壊され尽くした戦火の街の景。

光射す人なき街にカラス飛ぶ (流天)

梅の花が咲いてから戻らないけど

まだあそこでおそばを食べてるの

別にかまわないのよ

影踏みはどうに終わったし

私は古ぼけてしまったし (糸瓜曜日)

◆ 作品評から

サキユバスの夢の快感秋涼し 菊池洋勝

「サキユバス」夢の快感と重複しているのでどちらかは
いらぬのだが切ると作者の本意が伝わりにくいだろう。

実は作句はここから言葉の斡旋を考えるのが面白かったり
する。(月波与生)

体育祭 画面向こうのリアタイの汗 水の眠り

「体育祭・運動会」は秋の季語になりますが、わたしが住
んでいるところの小中学校は5月頃に体育祭・運動会があ

ります。なんでも、もし骨折とかしてお受験に差し障った
ら・・・というこららしいです。

時代の変遷と共に、歳時記も改変の必要があるのかもしれない
ませぬ。(蔭一郎)

夏空に六番ショート西の雨 まつりべきん

「夏空に六番ショート」まではとてもいい。最後の5
音を是非検討してほしい。できるなら1番から9番まで守
備位置を入れて詠んでみてほしい。(月波与生)

お仕置きは檸檬の種をつめこんで 小沢史

「ほんとに、お仕置きをしてやりたい人がいますねえ。
いないより良いわよねえって、自分に言い聞かせてます。
お仕置きと檸檬の取合わせがとても好きです。酸っぱさと
ほろ苦さと、泣いた後の爽やかさと。(木野清瀬)

気まずいな神様なんて呼んでない まつりべきん

「呼んでもない神様が来ると気まずい場面というのは、
どういうシチュエーションなのか想像力をすごく刺激させ
る一句。わたしは外で偶然に家族を見かけるとひどく気ま
ずい気分になる。そんなときに神様が来ても困る。(蔭一郎)

ヘアサロン帰りの猫とすれ違ふ 空瓶

「こういう句は擬人化しないでそのまま「猫」として読
んでいる。これだけの猫がいるんだもの、ヘアサロン帰りの
猫が居てもいい。世界は自分が思っている以上に不思議
で溢れている。(月波与生)

秋だなあ小田和正が泣いている 月波与生

「小田さんの曲、秋から冬にかけて本当にしみます。(同
居嫁の呟き)

く秋と小田和正さんが微妙にマッチしているさみしさが
滲み出ているいい句だと思います。(ゆりのはなこ)

梅の花が咲いてから戻らないけど
まだあそこでおそばを食べてるの

別にかまわないのよ

影踏みはどうに終わったし

私は古ぼけてしまったし (糸瓜曜子)

く「影踏みはどうに終わったし」の一文が無性に寂しい
雰囲気です、好きです。詩を書いてみたいけど難しそうなの
で：懂れます。(なゆた)

只今の決まり手は寄り切り。寄り切って衣被の勝ち。あ

く「衣被」対戦相手は誰だったのかと想像しています、取
れたての里芋、美味しいですね。(同居嫁の呟き)

雄の梨違ふ籠には雌の梨 しまねこくん

く果樹には雌雄異株(花)と雌雄同株(花)があるが梨
は雌雄同株。とはいえ掲句の籠の中には雄と雌別々の実の
存在を感じさせる。(月波与生)

階段をのぼりきつても不眠です 石川聡

くこの「ても」という助詞の複合体が本来ならば不連
続をさも連続であるかのように(つまりは「曲者」の働き
をなして)不眠を肯定してしまっている。これが川柳のや
り方そのものでしょう。(黒穂2022)

さふ言へば今年あと厄みなし栗 あ

くお気をつけて。ぼくはあと厄の時、不整脈になりましたし
た。救急車で病院に向かう途中、治ってしまいました(あ
ら)

嘘ついていちばんかたいグミになる 小沢史

〜一番硬いといってもグミなのでたかだ知れているのである。というか「グミになる」こと自体がすでに嘘だったりする。たわいない嘘を信じながら僕たちは生きています。

(月波与生)

初恋を開ける缶切りなんて無い 睦月ヨシ

〜おめでとう産みの苦しみね (寫りす)

ゆかりりがりりと鳴かす蜻蛉かも 抹茶金魚

〜おお！自動俳句生成システムゆかりりが詠まれるとは

(石川聡)

一九六〇年代らしくドアが汚れていた 海馬

〜「らしく」の多様性が一句に多様な響きを与えています。

1960年代みたいな汚れでもあり

1960年代に見た汚れでもあり

そして「汚れていた」との突き放しているかのような響きで、一句は乾いた虚無を呼び出してくるのです。(岡村知昭)

花、花瓶、猫、留守、破片、水、花、あまつりへきん

〜掲句中の主体は、2回目の「花」の登場で思考の視線のループに気付く。

結語の「あ」はそれを認識した瞬間の詠嘆。

品詞の並列の手法だけど、最後の「あ」のみ異質のものが置かれた印象。そこに詩的レトリックの存在を感じますし、レトリックによるポエジーの立ち上がりをも感じるのでした(石川聡)

廊下で猫が毛玉を まつりぺきん

〜続くかもしれない様々な言葉情景が浮かんでは消え
浮かんでは消えて、物語の中をさま迷っているような感覚を
得ました。(さー)

わたくしはわたしにゆかりがない秋だ 蔭一郎

〜わたくしはわたしにゆかりがない、すなわちわたくし
とわたしは別の誰かである。では今の自分は「わたくし」
か「わたし」か、もしやどちらでもない誰かなのか。秋の
1日、そんな物思いにふけるわたくしは、いったい誰だ。

(岡村知昭)

戒名を少し文字って島流し さー

〜「文字って」は振ってのこととして読んだが別な意味
かもしれない。が、戒名で始まり島流しで終わる重心の低
いこの句がカラッと明るいのはこの「文字って」の貢献。

(月波与生)

冷や飯にしようゆをかける台所 さんちゃん

〜これは確かに寂しい(丹花ヨム)

髪を切ったから失恋でもしよう 蔭一郎

〜昔あべこべ、とはいうものの、個人的にはしっくりくる
句。好き。なんやかやで伸ばしていた髪を、自分の気持ち
に合うように整えると、思い悩んだことに区切りをつけら
れることがある。自分で選ぶ失恋はきつとさみしくもさつ
ぱりしているだろう。(森内詩紋)

睫毛って物語だよ知らないの？ 太代祐一

〜太代さんの喋り方だ。「○○だよ、知らない？」って
よく言ってる気がする(寺村たこ)